

[書評] 稲松尚子 律令裁判手続に関する一考察: 主としてその運用面より見たる

著者	梅田 康夫
雑誌名	法制史研究 = Legal history review
巻	33
ページ	209-211
発行年	1983-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/17033

稲松尚子「律令裁判手續に關する一考察——主としてその運用面より見たる——」(お茶の水史學第二五號)

律令裁判手續に關する論文はここ數年影をひそめていたが、

久しぶりに新しい研究があらわれた。本論文はその副題にあるように、主に運用の面から律令裁判手續を考察したものであり、現實に生起した具體的な事件の處理の仕方が律令の規定にはたしてどの程度合致していたか否かを説明せんとしている。全體を大きく訴訟と斷獄の二つの章に分けて構成しているが、筆者の言によれば「これは二系統説を支持するが故の分類ではない」(一九頁)ということである。

前半の訴訟のところでは、田宅の訴訟に限つてのみ検討を行なっている。そして、その結果得られた結論は、(1)提訴官司は令の規定と異なり、係争地の所轄官廳であること、(2)班田制の衰退にともない田圖田籍の證據能力が低下し、公驗の重要性が増大していったこと、(3)判決權は基本的に國司が掌握していたこと、(4)越訴禁止の律令の規定が時代が下るに従い無視されていったこと、の四點である。

後半の斷獄のところでは、主に郡司、國司、刑部省、太政官等の裁判管轄の問題について検討が加えられている。ここで得られた結論を筆者は三點にまとめているが、(1)(2)の點は密接に關連している。そこにおける筆者の主張で重要な點は、刑部省の覆斷において郡司の斷定は全く問題とならず、國司の斷定のみが案覆の對象とされ、國司だけがその斷定の當否に係わる責任を問われたこと、そして、國司は郡司の斷定にとらわれることなく、郡から上申された獄案についてあらためて審理を行なつたことである。そこから筆者は、郡司の裁判權を過大に評價することはできないとする。結論の(3)は、流以上の重大事件に

對する太政官の案覆について、實際には獄案は辨官から刑部省に送られ、刑部省で案覆されたとする。そして、律令の規定の趣旨においても、太政官の案覆とは太政官（辨官）を通して刑部省が案覆を行なうことを意味したと理解する。

そもその筆者の意圖は、いわゆる二系統説と一系統説の對立する律令裁判手續について、その實態を統一的に理解しようとする點にあるが、本論文はそのための前提作業ということであり、この兩説に則した検討はまだ行なわれていない。しかし、個々の裁判例を分析し、實態面から律令裁判手續を説明するという方向性は首肯し得るところであり、こうした面の研究は勿論これまで等閑視されてきたわけではないが、筆者がいうようにより研究の深化が望まれているところであらう。そういった意味で、本論文は導き出されたいくつかの結論とともに、この分野の研究にとって裨益するところ大といわねばならない。

しかしながら、筆者が導き出した結論のうち、少なくとも二つの點に私は従うことができない。すなわち、訴訟に関する(3)の點と斷獄に関する(3)の點である。前者については別稿（越田について）、龍川政太郎先生米壽記念『律令制の諸問題』掲載予定）で詳細に論じたので、ここでは本論文で取り上げられている貞觀年間の觀世晉寺と内藏寮との間の田地爭訟においても、最初に事件は郡司に提訴され、以後、國司、大宰府へと上訴が行なわれたと筆者自身が解していることだけを指摘しておく。

さて、後者の流以上の重大事件に對する太政官の案覆についてであるが、筆者が前述のごとく實際にはそれは刑部省で案覆

されたと考えた大きな理由の一つは、正史にあらわれてくる裁判例において、國司から上申された獄案が刑部省によつて覆斷されている場合が多く存したからであらう。しかし、太政官の案覆とは實際には刑部省の覆斷を意味したとする筆者の論據は極めて薄弱なものとしか考えられない。というのは、筆者のうちに獄令郡決條の太政官案覆を理解するならば、同條後段にある審理不十分の場合の規定が全く理解できなくなるからである。すなわち、そこでは在京の場合には刑部省に差し戻すことになっており、實際には刑部省で案覆したものをさらに同省が案覆することになってしまう。これは筆者も奇妙な事象として述べている、在京の場合の刑部省から上申された獄案についての太政官案覆とあわせて考えると、刑部省による獄案は、辨官を経由して實際上同省によつて案覆され、審理不十分を理由に同省に差し戻される、という全く荒唐無稽な理解に陥ってしまうことになる。また、獄令有疑獄條では國の疑獄について刑部省からさらに太政官に事件が移送されることを規定している。これは獄令郡決條の覆審や案覆と規定の趣旨は異なるとはいへ、この規定の仕方をみても刑部省と太政官の審理は明確に區別されて觀念されているとしか思われない。

律令の規定の趣旨においても太政官案覆とは刑部省による案覆を意味することを示す史料として、筆者は公式令受事條の義解および問答や名例律除名條の疏を掲げる。しかし、これらの史料も筆者の説を成立させ得るものとは思われない。筆者の説に最も適台的な内容を有しているのは公式令受事條の問答であ

るが、しかしこの史料についてはその史料的人格自體が問題とされなければならない。この問答が所載されている令集解の巻は、いわゆる異質令集解として知られるものである。その史料的人格については、近年、利光三津夫、齊川眞氏や早川庄八氏等によって論ぜられてゐるが、私はそれが私記として編纂されたのは令集解成立以降であり、その内容には律令本來の規定の趣旨からはずれる部分が少なからずあると考えている。したがって、流以上の重大事件に對する國司の獄案を刑部省の判事が覆斷するというこの問答の内容が、律令の規定の正しい解釋から導き出されたと考えることには容易に従えない。

次に公式令受事條の發解や名例律除名條の疏にあらわれている判事や刑部の覆斷についてであるが、筆者はこの覆斷は太政官の案覆という狀況にもなつて行なわれたとみるが、そのような必然性はない。私にはかかる刑部省の覆斷は、たとへば京職による徒罪以上の獄案に對して行なわれたと考える。京職の裁判權については、刑部省と審級を同じくし、京に貫屬する一般人についてのみ成立し、流以上の犯罪については裁判權がなかったとする理解があるが（たとへば奥野彦六『律令制古代法』三〇六頁以下）、私はこのような理解は少なくとも律令本來の規定の趣旨としては間違つてゐると考える。詳しい論證は割愛させて頂くが、京職の裁判は必ずしも一般人に限定されるわけではなく、そして流以上の犯罪についても斷定したと考える。地方における國司と郡司の裁判管轄に對應する形で、中央においては京職が刑部省の下級審としての位置を占めていたといえよう。

したがって刑部省の覆斷は京職との關係で生じてきたものである。太政官の案覆は天皇に對する論奏や奏事との關連で行なわれるものであり、刑部省の實質的審理とは區別されており、それをも含みこんだ形で太政官案覆を構成することは律令本來においては成立し難いといわざるを得ない。

本論文を一讀すると、筆者は明言していないが、訴訟においては實際の裁判では律令の規定がかなり無視され、斷獄においては律令の規定に従つた形で裁判が行なわれたような印象を一見受ける。しかし、以上述べたように本論文が導き出した結論のなかには、そのような印象と逆行する形で疑問と思われる點がある。それ故、もしそのような枠組で律令裁判規定の運用を捉えていくとするならば、はたして實りある成果に結びつき得るかどうかが、かなり疑わしく思われることを最後に多言ながら述べておく。

（梅田康夫）